

## わたしたちの慰め

慰めという言葉が、パウロによって、ここには印象深く使われています。慰めという言葉の変奏曲と言ったら良いのでしょうか、まずパウロはわたしたちに、神を褒め称えるように、賛美の声をあげるように招きます。その根拠は神さまへの呼びかけのなかに、上手に織り込まれています。「わたしたちの主イエス・キリストの父である神」「慈愛に満ちた父」「慰めを豊かにくださる神」と、このように少しずつ情報を加えて主題を豊かに展開してゆきます。わたしたちの主イエス・キリストの父であり、慈愛に満ち、慰めを豊かにくださる神が、たがいに重なり合い、ひとつの響きのように描き出される。ドミソのみつつの音があわされば、ハーモニーとなって和音、倍音の響きを生み出すように、ここでは慰めは、豊かな慈愛につながれ、それがわたしたちに主イエス・キリストを送ってくださったことによって、わたしたちの父と呼ばれる方となって下さった。それこそが「慰め」の意味内容であると一筆書きで語られています。だから、あなたがたはこぞって神をほめたたえよ、という招きがまず力強く主張される。礼拝とは神を賛美することだという主張がここに 있습니다。これは賛美の重要性、神を褒め称えることの大切さをあらためてわたしたちに教えるものです。一般的に日本人が神仏に向かい合うとき、それは願掛け、お願いごとをしにいく感覚ではないでしょうか。神社やお寺にお参りする時、神仏を賛美するという心構えで行く人がどれほどいるのでしょうか。「苦しい時の神頼み」という諺があります。しかし、それでいうならばわたしたちキリスト者は、この箇所でのパウロの主張、新共同訳聖書の小見出しが「苦難と感謝」とまとめたように、「苦しい時も神賛美」というべきでしょう。それはまさに苦しい時、悲しい時、苦難の時にこそ、神の慈愛、慈しみと憐れみを体現されたキリスト・イエスが、わたしたちに向けて生きて下さっ

たこと、苦難を担われたことによって、そこに慰めが満ちる。どん底にも光が輝いている。義の太陽であるキリストが、わたしの傍らにおられる。そのことをわたし自身の苦難の出来事を通して体験することで、慰め主である神が今も生きて働いておられることがわかる。感謝が満ちる。そのキリストによる慰めの尊さが、ここで歌われております。賛美されています。わたしたちの神は褒め称えられよ、と叫んでいる。神は、あらゆる苦難に際して、わたしたちを慰めてくださる！だから、わたしたちもこの神からいただく慰めによって、あらゆる苦難のなかにある人々を慰めることが出来る、とパウロは神から人へと慰めを手渡してゆくのです。しかし、もう少し丁寧にこのことを、神からいただく慰めとは何かを語らなければならないように感じます。少し、回り道をしたいと思います。

昨日は3月11日、あの東日本大震災から12年目の日でした。いろいろな振り返りのイベントや放送の企画がこの日にあわせてあったようです。死者15900人、行方不明者2523人、避難民3万1438人、建物の全壊半壊を合計すると40万5117棟、甚大な人的物的被害をもたらした、原発事故という複合的な災害によって国土が喪われるという放射能汚染の問題は継続中です。あの年、「絆」という言葉が立ち上がりました。たしか年末に選ばれるその1年をあらわす漢字も「絆」が選ばれていました。絆は、人と人をつなぐもの、連帯の意味と捉えました。この巨大な悲劇をともに協力しあって支え合おうという意志を感じました。ただわたしはこの出来事のなかに鎮魂という働き以外に宗教の働きをあまり感じませんでした。むろんさまざまな宗派が被災地に宗教者や、ボランティアを遣わして働きました。日本基督教団も石巻と釜石に拠点をおいて長く働きを続けました。そうしたことも含めての「絆」という主張であったかと思うのですが、当事者以外の人たちからは、こういう出来事のとくに、神や仏は何をしているのか、あるいは神や仏もあるものかとい

った声もあがったようです。わたしは人間同士の連帯でこの悲劇に立ち向かおうとするが、神や仏は及びではないという空気を感じ取りました。間違っているでしょうか。ようするに上下でわけてしまっている。現実生きて死んでいくわたしたちの世界と神や仏の世界は関係ない。死者を葬ることに宗教者を用いるけれども神仏は及びではないという風潮、この世とあの世を二分してしまって水と油が分離しているように、わたしたちとは関係のないものとし、それを神や仏もあるもので済ませてしまうような霊的な感性の貧困さしか、物質文明の中で、インターネット環境のなかでコンビニエンスに生きるわたしたちは持ち得なかったのではないか。東日本大震災からさらに10年遡ってアメリカで同時多発テロが起きた2001年9月。アメリカの神学校に留学していた友人を気遣って様子を尋ねたところ、ふだん教会に行かない人たちもこのときは教会に集まって祈り、賛美をし、礼拝をともにしているという返事がきました。友人は世俗化が進んだとはいえ、キリスト教国アメリカという根っこの部分がこういう危機的な状況の中では立ち現れてくると体験を語ってくれました。そして、わたし自身は、この東日本大震災をここ愛知で迎えたわけです。何度かお話したことがあります。金曜日に震災、土曜日に原発事故、そして迎えた日曜日の朝は、この年の受難節第一主日で、月間予定でこの日に語る聖書箇所はすでに決まっていたわけですが、この特殊な状況下で何を語るのか、皆が生活の基盤としている現実が激しく揺さぶられ、深い淵が足元にぱっくりと口を開け、わたしたちを飲み込もうとしている。事態は收拾のきざしがまったく見えず、皆が語る意味ある言葉をなくしていた時に、神の言葉をどう取り次いだら良いのか、茫然としていたときに開いたローズンゲンのその日の言葉がエゼキエル書36章36節でした。「お前たちの周囲に残された国々も、主であるわたしが、この破壊された所を建て直し、荒れ果てていたところに植物を植えたこ

とを知るようになる。主であるわたしが、これを語り、これを行う」という御言葉がそこにありました。目に光がともりましたね。この日、ここに、この御言葉が備えられていたことを偶然とはわたしは考えません。今日の説教箇所との関連で言えば、わたしは神の語るこの約束の言葉によって慰められたのです。上からの言葉が下にいるわたしを捉えたのです。神はわたしたちの苦難と関係のない場所にいて共感もなく、超然と下々を見下ろしている方ではない。そのことがわかった。罪深いことに、わたしたちは顧みてくださる神を、日常生活のなかでは意識の外に追いやっている。わたしの生きる世界と神の世界支配、歴史支配が結びつかない。水と油、光と闇のように、世界をふたつに分けて、神さまを、わたしたちの日常に力を及ぼさない書物のなかの神だけにしているのではないか。そうではない。主は生きておられる。ふたつの世界があるのではなく、神がおさめられるひとつの世界があるだけです。低きに降る神として、イエス・キリストの父なる神として、このわたしの悲惨と苦難の現実のなかにやって来てくださっている主がおられる以上、このわたしたちの生きる世界全体は神の憐れみのなかに置かれている。こうして日常が破られて、非日常が始まる時、わたしたちは本当に、わたしを支え、慰めることがお出来になる方がどなたであるかということを知られる。わたしがあの朝、本当に感謝をもって知らされたことは、エゼキエル書の御言葉を通して、主の恵みのご支配から漏れた地はどこにもないということでした。いまわたしたちの愚かさによって原発事故によって国土が喪われ、放射能が風に乗ってどこまで汚染地域を広げるかもわからない。鎮火可能なのかもわからない。しかし、「主であるわたしが、この破壊された所を建て直し、荒れ果てていたところに植物を植えたことを知るようになる。主であるわたしが、これを語り、これを行う」という言葉によって、神が生きて働かれることをあらためて知らされたのです。わたしにとって

は横の、水平の人間の絆ではなく、上からくる慰め、あの世とこの世、水と油、光と闇といった二分法でこの世界をみる目が打ち破られて、ただ一人の神が、わたしたちの主であるイエス・キリストの父である神が、慈愛に満ちた父が、こうしてご自身を示してくださり、世界を救われるのはわたしであると宣言された。ふたつの世界があるのではなく、この世界を創造された主なる神が、わたしが、このことを行う、と宣言される声を聞いた。主が生きて働いておられる。あの日、そういう体験をしました。主の慰めを味わったのです。パウロも、今日は7節までしか読みませんでした。すぐ後の8節で、兄弟たち、アジア州でわたしたちが被った苦難について是非知ってほしいと語り、耐えられないほどに圧迫されて、生きる望みを失い、死の宣告を受けた思いであったと語っています。彼らが生きる現実はそのように過酷で、もうこの地上ではにっちもさっちもいかないどん詰まりの状況のなかで、パウロたちは、慰めを体験した。それは、神が生きておられるという真実でした。そして、自分を頼りにすることなく、死者を復活させてくださる神を頼りにするようになりました、と語るのです。ここにキリスト者の慰めの本質があります。苦難を通して、砕かれてゆき、ただ一つの慰めにたどり着くことを許された状態。パウロがここで体験し、繰り返し語る「慰め」、この言葉はギリシア語で「パラクレーシス」といいますが、その意味は「傍らに・立つ者」であるといわれます。不安や恐れに支配されて縮こまった人間、折れてしまった心のかたわらに立たれる存在、それは神の御言葉です。御言葉のなかにはたらく聖霊の力が、わたしたちを捉える。そしてこの神の約束の言葉は、ついにキリスト・イエスの到来によって実現し、それは十字架の死をへて陰府にまでいたり、ついには三日目の復活によって死を滅ぼし、朽ちず、汚れず、萎むことのない希望として指し示されることになります。興味深いことに、さきほどのエゼキエル書 36 章 36 節の御言葉のすぐあと、

37章にエゼキエル書で最も有名なエピソードである「枯れた骨の復活」が置かれているのです。戦に破れ、のざらしになったイスラエルの軍団の骨が埋葬されることもなく、枯れた谷に落とされて放置されている。非常に多くの白骨がそこに満ちていた。その場に遣わされたエゼキエルは、主の御言葉を取り次ぎます。枯れた骨よ、主の言葉を聞け。主なる神は言われる。見よ、わたしはお前たちのなかに霊を吹き込む。すると、お前たちは生き返る。その通りになったと言います。神に望みを置く者は失望することはないのです。

わたしたちの生きる世界は完結していて、他者を寄せ付けません。神を忘れている。非常事態が起きてもアクセスの仕方も分からないからうそぶくしかない。神も仏もいるものか、と。そうではない。神はいます。十字架につけられて。わたしたちの罪を担って、肩に十字架をくい込ませて、わたしの先を歩んでおられる。パウロはこの箇所を通して、生命の源である神への信頼を欠いた世界に対して、神の摂理、主の恵みのご支配への信頼を語りかけます。神は、わたしたちを慰めてくださる。それは、わたしたちが、わたしたちのままで生き延びることを意味しません。そうではなく、わたしたちが頼りにしている自分の力であるとか、人間性への期待で世の中がよくなるとか、科学の力でなんとかなるとか、そうしたことなく、わたしの根源的なところから染み出してくる罪の問題、それが押し広げる死の恐怖、それらすべてが神の手によって解決されているというイエス・キリストの出来事、神ご自身がこの問題を担われるというキリストの真実、このただ一つの慰めによって、すべてが覆われているという出来事を指し示すのです。苦難にあったとき、わたしが何を支えとしているかが明らかになります。パウロは望みが絶たれた時、傍らに立たれるキリストを知った。身に迫る神の愛が、死の力をも打ち破る強さを持つことを、我がこととして知った。だから、あなたがたも苦難のとき、キリストの十字架と復活の御業によ

って、神がどれほど大きな慰めを下されたかを体験することが許される。そして、主が生きて働かれる方であることを知る。この恵みを分かち合うこと、それがわたしたちの自己完結した世界を打ち破り、「わたしたちの主イエス・キリストの父である神」「慈愛に満ちた父」「慰めを豊かにくださる神」を賛美して生きる新しい命の道への招きとなることを証しているのです。この信仰の消息を分かち合い、わたしたちも慈愛に満ちた父なる神を力強く賛美したく願います。

お祈りいたします。